# 時を表す機能語

## —「たとたんに」「かと思うと」「やいなや」「～か～ないかのうちに」「が早いか」の意味・特徴の検討—

奥　村　大　志

日本語コミュニケーション学科非常勤講師

### 1.　はじめに

本稿では、時を表す機能語（日本語能力試験出題範囲表にとりあげられた形式）のうち、「～するとすぐに…」の意味を担う諸形式の意味・特徴を明らかにする。その方策として、次のような方法を採用する。まず、この分野の代表的な参考書である『教師と学習者のための　日本語文型辞典』（なお、以下では『文辞』と略記する）と『どんな時どう使う　日本語表現文型 500』（なお、以下では『500』と略記する）から個々の形式ごとの記述を挙げ、それらの記述について検討し、諸形式がどのような意味・特徴を持つかを考える。さらに、これら類義形式間の違いについて述べる。本稿の意義は、未だ様々な問題が残されている、これらの機能語の意味・用法をより一層明らかにするところにある。また、上記のような方法をとることにより、これらの参考書が改訂されるとき、あるいは新たに刊行される同種の辞典の基本的な検討資料を提供できるというメリットがある。

### 2.1　「たとたんに」の従来の記述

以下に、参考文献からの引用を載せる。

▼『文辞』引用開始（p.344）

＜1　Vたとたん（に）＞

(1) ドアを開けたとたん、猫が飛び込んできた。

(2) 有名になったとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。

(3) 試験終了のベルが鳴ったとたんに教室が騒がしくなった。

(4) 注射をしたとたん、患者のけいれんはおさまった。

動詞の夕形を受け、前の動作や変化が起こるとすぐ後に、別の動作や変化が起こるということを表す。後の動作・変化を話し手がその場で新たに気付いたような場合に用いられるため、「意外だ」というニュアンスを伴うことが多い。したがって、話し手の意志的な動作を表す表現が後に来る

場合は用いることができず、代わりに「とすぐに／やいなや」などが用いられる。

（誤）私は家に帰ったとたん、お風呂に入った。

（正）私は家に帰るとすぐにお風呂に入った。

▲引用終了

▼『500』引用開始（p.42）

～たとたん（に）【～したら、その瞬間に】

●「～が終わったのとほとんど同時に予期しないことが起こった」と言いたい時に使う。

前のことと後のことは、互いに関係があることが多い。

(1) ずっと本を読んでいて急に立ち上がったとたん、めまいがしました。

(2) わたしが「さようなら」と言ったとたん、彼女は泣き出した。

(3) 出かけようと思って家を出たとたんに、雨が降ってきた。

(4) 電話のベルが鳴ったとたんに、みんなは急にシーンとなった。みんなが待っていた電話なのだ。

▲引用終了

### 2.2 「たとたんに」の検討

『文辞』の説明文の第１文「動詞の夕形を受け、前の動作や変化が起こるとすぐ後に、別の動作や変化が起こるということを表す。」の前半は形態的な特徴であり、また後半は同時性を表す諸形式に基本的に共通する特徴を指摘しており、問題はない。

ところが、『文辞』の説明文の第２文「後の動作・変化を話し手がその場で新たに気付いたような場合に用いられるため、『意外だ』というニュアンスを伴うことが多い。」と『500』の黒丸のあとの説明「予期しないことが起こった」というのは、検討の余地がある。例えば「ドアを開けたとたん、いつも猫が飛び込んでくるので、今日は慎重に開けることにした。」の文は可能であろう。「いつも」と共起するということは、十分予期できる内容になっているということであり、「新たに気付いた」や「予期しない」が必ずしもこの表現の本質ではないことを伺わせる。（ただし、そのような場合に使われることが多いということは言えるであろう。）

『文辞』の説明文の第３文「したがって、話し手の意志的な動作を表す表現が後にくる場合は用いることができず、代わりに『とすぐに／やいなや』などが用いられる。」の「したがって」以下の前半は、正しいであろう。（なお、「したがって」は、直前の「『意外だ』というニュアンスを伴うことが多い。」を受けるのではなく、その前の「新たに気付いたような場合に用いられる」を受けるのであろう。）言い方を変えれば、話し手以外の意志的な動作や、話し手の無意志的な動作、意志性に関わらないできごとは「たとたんに」の後に生起する。しかし、この第３文の後半は、検討の余地がある。「とすぐに」が用いられるというのは、この形式がより基本的な広い表現であることから、正しいと言えるが、「やいなや」を代わりにするというのはどうであろうか。「やいなや」は書きことば的な表現であり、「とすぐに」よりも使い方が狭い（口語的な文脈では使えない）。このような書き方だと、いつでも言い換えられると誤解する人がいるかもしれない。なお、

『500』の説明文には「前のことと後のことは、互いに関係があることが多い。」とあるが確かにそうであろう。この記述は『文辞』にはない。「とすぐに」で言い換えられる場合があることから、契機的関係が存在する場合があることも当然含んでいる、ということかもしれないが、特徴の一つとして明示しておくことが望まれる。

ところで、この点については『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（なお、以下では『ハンド』と略記する。）にも記述がある。そこでは、「『～たとたんに』は『～と同時にetc』に大変似ていますが、異なるのはPがきっかけや原因になってQが起こるというニュアンスがあるという点です。」(p.455)と述べ、「お金の話を持ち出したとたん、相手が怒りだした。」(p.455)などの例文を示している。（なお、Pは前件、Qは後件を指している。）ここまではよいが、その後、「そのような因果関係がなく、単にPとQがほぼ同時に起こったことをいいたい場合には、『～たとたん（に）』は不自然になります。」(p.456) と述べて、「×彼は家に着いたとたん、会社に電話をかけた。」(p.456)（「や否や」と比較せよと書いてある）、「×空が暗くなったとたんに、雨が降ってきた。」(p.456)（「かと思うと」と比較せよと書いてある）の例を（言えない例として）挙げている。ところで、もし、この記述が正しければ、『500』の例文（3）は、不適切な例を正しい例として挙げていることになる。この例は「家を出たとたんに雨が降ってきた」のであるから、「家を出たこと」と「雨が降ってきた」ことに契機や因果関係があろうとは思われないが、それでも、この文は十分成り立つと思われる。（注1）したがって、『ハンド』に書かれている、「因果関係がない場合は不自然になる」という記述は、少々強い規定になっていると考えられる。結局、契機・因果関係があるものも多いが、そうではないものもある、というのが、実情であろう。（注2）

### 3.1 「かと思うと」の従来の記述

以下に、参考文献からの引用を載せる。

▼『文辞』引用開始（p.318 - p.319）

<9　…とおもうと>

a　V-るかとおもうと→【とおもう】2a

b　V-たとおもうと

(1) 急に空が暗くなったかと思うと、大粒の雨がふってきた。

(2) 山田さんたら、来たと思ったらすぐ帰っちゃった。

(3) さっきまで泣いていたと思ったらもう笑っている。

(4) やっと暖かくなったかと思うと、今朝は突然の春の雪でびっくりした。

(5) 夫はさっき家に戻ってきたかと思ったら、知らぬ間にまた出掛けていた。

(6) 今までニコニコしていたかと思えば、突然泣き出したりして、本当に、よく気分の変わる人だ。

(7) ちょっとうとうとしたかと思うと、突然大きな物音がして目が覚めた。

二つの対比的なことがらがほとんど同時につづいて起こることを表す。「V-たとおもったら」「V-たとおもえば」の形も用いられる。また、「V-たかとおもったら」となることも多い。後ろには

話し手の驚きや意外感を表す表現が続くことが多い。話し手自身の行為について述べることはできない。

（誤）私は、うちに帰ったと思うとまた出かけた。

（正）私は、うちに帰って、またすぐに出かけた。

▲引用終了

▼『500』引用開始（p.42）

～（か）と思うと／～（か）と思ったら【～すると、すぐに】

●「～が起こった直後に後のことが起こる」と言いたい時に使う。

(1) 空で何かピカッと光ったかと思うと、ドーンと大きな音がして地面が揺れた。

(2) あの子はやっと勉強を始めたと思ったら、もういねむりをしている。

(3) うちの子どもは学校から帰って来たかと思うと、いつもすぐ遊びに行ってしまう。

▲引用終了

### 3.2 「かと思うと」の検討

『文辞』の説明文の第１文「二つの対比的な事柄がほとんど同時につづいて起こることを表す。」は、重要な点を突いているが、すべてに当てはまるわけではないので、その点に気をつける必要がある。例えば『文辞』の例文（1）の「空が暗くなった」ことと「大粒の雨がふってきた」ことは、対比とは言えないであろう。（例文（2）が「来た」「帰った」の対比、例文（3）が「泣く」と「笑う」の対比であることと並べてみれば、対比とは言えないことはよくわかる。）

『文辞』の説明文の第２文「『V-たとおもったら』『V-たとおもえば』の形も用いられる。」は、「V-たとおもったら」についてはそのとおりであろうが、「V-たとおもえば」は、（「ほとんど同時につづいて起こる」という意味では）使わないのが普通である。（試しに、例文（1）（2）に「V-たとおもえば」を代入してみればよい。これらは不自然な文になる。これより使わないのが普通であることは明らかと言える。したがって、その形式で言える例文（6）は、他の例文とやや違ったものと見るのが適切である。（この辞典では、「思うと」「思ったら」「思えば」を同じものとして扱っているが、以下、本稿では「思えば」を少し別のものと扱い、「思うと」「思ったら」を同じものと見ることにする。）

『文辞』の説明文の第３文に関連して、「か」の有無をどう考えるかという問題があるが、ここでは、「か」が入った場合には、それを強く認識したというニュアンスが加わるだけで、本質的には「か」のない場合と違いはないと考えておく。（注 3）『文辞』の説明文の第４～５文は、問題がないと思われる。

### 3.3 「かと思うと」に関する考察

前節で「対比」という重要な点を突いていると述べたが、ここでは、その「対比」という特徴を持つか否かによって「かと思うと」を二つに分けておく。（注 4）

まず、対比性がない『文辞』例文（1）のタイプ（Aタイプと略称）であるが、「するとすぐに」

という意味の面で「たとたんに」に似ており、言い換えが可能である場合もある。(違いについては後述。) このタイプに属するのは、他に『500』例文 (1) がある。

次に、対比性がある『文辞』例文 (2) 以下のタイプ (Bタイプと略称) であるが、これは、Aタイプとは、いくつか違っている点がある。

第1に、Bタイプは『文辞』例文 (3) のように、前件・後件に状態が来ることが可能である。これはAタイプの前件・後件が動作・変化に限られるのと違っている。

第2に、Bタイプは (対比的ということからある程度想像は付くことだが、) 前件と後件を「のに」などで結ぶことができるものが多い。Aタイプの文は「のに」などでは結べない。

第3に、Bタイプは、前件・後件で示される事柄の順番に関する制約が緩い。例えば、『文辞』例文 (2) であれば、「帰ったかと思ったらまた来た」のように、「来る」事柄と、「帰る」事柄の順序が変えられる。例文 (3) であれば、「笑っていたかと思ったらまた泣いている」のように、「泣く」事柄と、「笑う」事柄の順序が変えられる。(あくまでも、事柄同士の文レベルでの入れ替え可能性について論じているということに注意されたい。) Aタイプの文は前件・後件の順序を変えると、おかしな文になる。

第4に、Bタイプには、時に関する表現・あるいはそれを感じさせる表現が多い。『文辞』例文 (2) ～ (7) の順に、後件に「すぐ、もう、突然、知らぬ間に、突然、突然」が現れている。『500』では、例文 (2) (3) の順に、後件に「もう、すぐ」が現れている。もちろん、他に例を多く挙げれば、それらの要素が入っていない例文はあるだろう。また、これらの要素を取れば、文が成立しなくなるわけでもない。しかし、大切なのは、例文をこのような辞書類で挙げるときに、これらの要素を入れてしまうことの背景にあるのは何か、という問題である。これについては後述する。

以上から、次のような仮説を立てることができる。(注5)

「かと思うと」は本来、「～するとすぐに…」の意味を担う形式ではなく、対比的な事態を認識するときの表現である。しだいに、「～するとすぐに…」の用法を獲得し、最後に、対比性を失い、「たとたんに」と同じような使い方をする語になった。

この仮説について細かく見てみると、まず、対比的な事態の表現、例えば、「ここにいたかと思えば、(○思うと、○思ったら) 今度はあちらにいる。本当に神出鬼没な人だ。」というような使い方が、基本的な使い方であると考えてはどうかということである。(上記の第1～3の特徴は、ここからの帰結である。) この段階では、気付いたときには別の事態であるということを言うのであって、それが時間的な短さを表しているわけではない。(また、前件・後件の述語も「ここにいたかと思えば…」の例の場合は状態であって、時間的な短さとはなじまない。) 気付かないほど短い時間に別の事態に移行する、というような解釈を軸に、しだいに「～するとすぐに…」の用法を獲得していくが、その最初の段階が、『文辞』例文 (6) のタイプなのであろう。(この段階では「思えば」は使える。) そして、次の段階として、対比の意味を色濃く持つ「思えば」が使いにくくなるような段階があり、それが、『文辞』例文 (6) を除くBタイプということになる。しだいに時間性を表す形式に移行しつつも、まだ完全に時間の短さや同時性を表す形式ではない。上記

の第４の特徴は、Ｂタイプがそのような段階のものであることの反映であろう。つまり、完全に時間の短さや同時性を表すものではないため、時間的な性質を表す修飾語を付けたくなるということである。そして、最後に対比性を失ったのがＡタイプということになる。（注 6）

### 3.4 「かと思うと」と「たとたんに」の違い

「かと思うと」には前項で述べたようにＢタイプ（対比性を持っているようなタイプ）の文があるが、「たとたんに」にはない。これは大きな違いである。

ところで、Ａタイプと呼んだほうの「かと思うと」は、「たとたんに」に似ており、言い換えが可能な場合もある。ここでは、この両者の違いについて指摘しておくことにする。

まず、下の二つの例を比べてみたい。

「空で何かピカッと光ったかと思うと、ドーンと大きな音がして地面が揺れた。」（『500』例文（1））

「空で何かピカッと光ったとたんに、ドーンと大きな音がして地面が揺れた。」（上の文の「かと思うと」を「たとたんに」に入れ換えた文である。）

この例文を比べて言えるのは、「かと思うと」は、前件を認識したときと、後件を認識したときが非常に近かったことを表す表現であり、一方、「たとたんに」は、前件の動作・変化と、後件の動作・変化が同時にあるいは瞬間的に続いて起こったことに重点がある表現であるということである。（「たとたんに」は、事柄と事柄の同時あるいは瞬間性を表している。）

次はどうか。

「急に空が暗くなったかと思うと」（『文辞』の例文（1）の前件）

「急に空が暗くなったとたんに」（「たとたんに」で言い換え）

これを見ると、下の「急に空が暗くなったとたんに」は、不自然である。ただ、「急に」を取って、「空が暗くなったとたんに」なら、それほど抵抗がない。（もし抵抗があるとすれば、それは、空が暗くなる瞬間というのを想定できるかという辺りにひっかかるのだと思う。それならば、上の例文を「急に会場が暗くなったかと思うと」と「急に会場が暗くなったととたんに」に変えて試してみればよい。）ところで、問題なのは「急に」と「たとたんに」の相性が悪いのはなぜか、ということである。「急に」は一見、暗くなるという変化が急に起きたという時間的な短さを表しているように思えるが、これはその変化が「急だ」と思っている話者の判断を表しているのである。このことから、「たとたんに」の前件が、事柄として捉えられており、一方、「かと思うと」の前件は話者の認識を表していると言える。

また、次の文はどうか。

「ドアを開けたとたん、猫が飛び込んできた。」（『文辞』の「たとたんに」の項の例文（1））

「ドアを開けたかと思うと、猫が飛び込んできた。」（「と思うと」に言い換え）

この場合、言い換えをした下の文はおかしな文になっている。（もちろん、私が開けた場合を言っているのであって、他人が開けたのなら問題はない。）これは、「かと思うと」の前件は、外側から観察し、認識した内容が普通だからであろう。（したがって、話し手の直接動作は来ない。）一方、「たとたんに」の場合は、単なる事実・事柄として扱う内容が前件に来るので、それが自分の

動作であってもかまわない。

なお、「かと思うと」の場合は、人（もちろん話し手以外）が主体のとき、その動作主体の意志性を「たとたんに」の場合より強く感じる。これは、「（５才の男の子）翔太君は部屋に入ったとたんに」と「翔太君は部屋に入ったかと思うと」を比べてみると、面接か何かでいやいや入ったような場合には、「かと思うと」は使いにくく、逆にその部屋に何かをしようという積極的な意志があって進んで入る場合には、「かと思うと」が使いやすいという感じがするということである。（「たとたんに」は、いずれの場合にも使える。消極的・積極的に関係なく、事実として述べているという意味だからであろう。）

また、「かと思うと」は、人が主体のとき、その連続的動作の認識を表すというニュアンスがあるように感じられる。この点に関しては、対比の意味を持つＢタイプの場合にも言えることなので、（ただし、動作に限定することはできないので、連続的動作・状態などと言わなければならないだろうが）その性質がＡタイプにも引き継がれていると考えられる。これが、前件に意志性を感じることがあるということの背景かもしれない。後件で意志的な動作をしようという場合であり、かつ、連続的動作の認識を表す（前件・後件が同じようなものでありそれが続けて起こることを同じように認識する）というニュアンスがあるのであれば、前件も意志的になるのが自然であろうと思われるからである。

### 4.1 「やいなや」の従来の記述

以下に、参考文献からの引用を載せる。

▼『文辞』引用開始（p.602）

2　V-るやいなや

(1) 彼はそれを聞くやいなや、ものも言わずに立ち去った。

(2) その薬を飲むやいなや、急に眠気がおそってきた。

(3) 開店のドアが開くや否や、客はなだれのように押しよせた。

ひとつの動作に続いてすぐに次のことが行われる様子を表す。「…するかしないかの短い間に」「…するとすぐに」の意味。書きことば。

▲ 引用終了

▼『500』引用開始（p.44）

～や・～や否や【～すると、同時に】

●「～が起こった直後に後のことが起こる」と言いたい時に使う。

(1) よし子は部屋に入って来るや、「変なにおいがする」と言って窓を開け放した。

(2) そのニュースが伝わるや否や、たちまちテレビ局に抗議の電話がかかってきた。

(3) 社長の決断がされるや否や、担当のスタッフはいっせいに仕事にとりかかった。

→　後のことは前のことに反応して起こる予想外のできごとが多い。

▲引用終了

### 4.2 「やいなや」の検討

ここでは「や」と「やいなや」は同様のものとして扱う。『文辞』の解説には「ひとつの動作に続いてすぐに次のことが行われる様子を表す。『…するかしないかの短い間に』『…するとすぐに』の意味。書きことば。」とあるが、「…するかしないかの短い間に」と言わないほうがいいだろう。語の構成から言うと、「や」と「いなや」であるから、「するか」「しないか」という意味が元々の意味であるが、(構成からは「～か～ないかのうちに」に近くてもおかしくないのだが) 現代では、元の意味を失い、前件の直後を表す表現になっている。(注 7)

『500』の解説であるが、意味の「【～すると、同時に】」説明の「後のことは前のことに反応して起こる予想外のできごとが多い。」は問題がない。(「が多い」ということなので、そうではない例もあるということである。) ただし、予想外という特徴は、「やいなや」だけが持つ特徴ではないので、これにも当てはまるということに過ぎない。ところで、書きことばであることは、記述してあってもいいのではないかと思う。「やいなや」の特徴であるからである。(『500』では、マークで書きことばであることを示すのだが、この項にはそのマークがない。)

### 5.1 「～か～ないかのうちに」の従来の記述

▼『文辞』引用開始（p. 49）

d　V-るか　V-ないうちに

(1) 夕食に手をつけるかつけないうちに、ポケットベルで呼び出された。

(2) 朝まだ目がさめるかさめないうちに、友達が迎えにきた。

(3) その手紙の最初の一行を読むか読まないうちに、もう何が書いてあるのかだいたい分かってしまった。

同じ動詞を繰り返して用いて、「なにかをし始めてまだほとんど時間がたっていない時に」という意味を表す。

▲引用終了

▼『500』引用開始（p.43）

～か～ないかのうちに【～すると、同時に】

●「～が起こった直後に後のことが起こる」と言いたい時に使う。

(1) 子どもは「おやすみなさい」と言ったか言わないかのうちに、もう眠ってしまった。

(2) 彼はいつも終了のベルが鳴ったか鳴らないかのうちに、教室を飛び出して行く。

(3) この頃、うちの会社では一つの問題が解決するかしないかのうちに、次々と新しい問題が起こってくる。

→　×国へ帰ったとたんに、結婚しようと思います。

　　×学校から帰って来たかと思うと、すぐ勉強しなさい。

　　×空港に着くか着かないかのうちに電話をかけるつもりです。

「～たとたん（に）」「～（か）と思うと・～（か）と思ったら」、「～か～ないかのうちに」は、現実のできごとを言うのであるから、命令文、意志を表す文（う・よう・つもり）、否定文などが

後に来ることはない。「～が早いか」、「～や・～や否や」、「～なり」も同じ。
▲引用終了

### 5.2 「～か～ないかのうちに」の検討

『文辞』の例は「～か～ないうちに」になっているが、やはり「～か～ないかのうちに」のほうが一般的であるように思われる。『文辞』の解説「同じ動詞を繰り返して用いて、『なにかをし始めてまだほとんど時間がたっていない時に』という意味を表す。」というのは、「なにかをし始めて」と言ってよいかどうか疑問である。確かに、『文辞』例文（1）（3）の場合には、「食べ始め」や「読み始め」の直後なのだろうが、『文辞』例文（2）では、「完全に目が覚める」直前という感じがする。これは、述語の時間的構造が違うからである。「読む」では、全く読む行為が行われていない状態があり、そこにそれまでとは違う、「読む」という動きが始まるのであるが、「目が覚める」は「眠っている」＝「目が覚めていない状態」があり、そこからだんだん、完全に目が覚めたといえる段階まで、徐々に変化をしていく。このような場合には、「目がさめるかさめないかのうちに」は、「完全に目が覚める」以前のもやもやとした状態（ぼんやりとしていてはっきりしない状態）の時を指すと思われる。『500』の例文（3）も「一つの問題が解決するかしないかのうちに」というのは、もう少しで完全に解決すると思っているときのことを指すと思われる。したがって、『500』に挙げられた意味「～すると、同時に」もこれだけでいいのか、疑問である。表現としては、前件の動きが起こったかどうか（場合によっては終わったかどうか）はっきりしないぐらい早い段階で、次の動作・変化が起こったという一種の強調表現という面もある。（「くらい」というのが重要なところである。）したがって、前件動作等のどの部分を指すかは、それほど重要ではないという意見があるかもしれないが、「一つの問題が解決したとたんに次の問題が起こる」のと「一つの問題が解決するかしないかのうちに次の問題が起こる」のは、事態として違う内容であり、やはりこの形式の特徴として考えておくべきことのように思われる。なお、『500』では、この項の下に、「たとたん」等の表現における文末についての説明を一括して載せているが、否定の扱いについては、注意が必要である。（注 8）

### 6.1 「が早いか」の従来の記述

▼『文辞』引用開始（p.84）
［V-るがはやいか］
（1）そのことばを聞くがはやいか、彼はその男になぐりかかった。
（2）その男はジョッキをつかむがはやいか一気に飲みほした。
（3）こどもは、学校から帰って来ると、玄関にカバンをおくが早いか、また飛び出していった。
（4）その鳥は、ウサギをするどいツメでとらえるが早いか、あっと言う間に空にまい上がった。
「X がはやいか Y」の形で、X が起こるのとほとんど同時に Y が起こる、という意味。「…やいなや」「…とたんに」書きことば。
▲引用終了

▼『500』引用開始（p.43 - p.44）

～が早いか【～すると、同時に】

●「～が起こった直後に後のことが起こる」と言いたい時に使う。

(1) 小田先生はチャイムが鳴るが早いか、教室に入ってきます。

(2) ひろ子は自転車に乗ったが早いか、どんどん行ってしまった。

(3) その警察官は遠くに犯人らしい姿を見つけるが早いか、追いかけて行った。

▲引用終了

### 6.2 「が早いか」の検討

『文辞』の解説「X が起こるのとほとんど同時に Y が起こる」、『500』の意味「～すると、同時に」、同解説「『～が起こった直後に後のことが起こる』と言いたい時に使う」は、誤りではないが、これだけでは、他の形式との差はわからない。また、『500』のほうには、書きことば的表現である注記が欲しい。

### 6.3 「が早いか」に関する考察

挙げられた例文の観察をすると、まず、前件と後件の主体が一致している文が多い。(『500』例文（1）以外はそうなっている。一方で例文（1）のように前件と後件の主体が異なっていてもかまわないわけである。）また、後件は話し手以外の行為主体による意図的な動作が多い。（ここに挙げられた例文はすべてそうである。）言い方を変えれば、後件に自然現象が来るような例文は挙げられていない。これらのことから、「が早いか」の典型は、意図的な動作が連続するような文であり、前件が「チャイムが鳴る」等の事柄を表すもの（意図的ではないもの）は、少しだけ典型から外れた文であると言えそうである。

### 6.4 「が早いか」と「たとたんに」の違い

「が早いか」の後件は話し手以外の行為主体による意図的な動作が多いが、「たとたんに」は、話し手以外の行為のほか、自然現象などでもよい。「が早いか」は前件と後件の主体が一致している文が多いが、「たとたんに」は、そのような偏りがない。また、「たとたんに」は、前件と後件の間に契機・因果の関係があるものが多いが、「が早いか」はそのようなことはない。

上記のような違いのほかに、話し手以外の意図的な動作を表す文の場合に、どのような違いがあるのかについて述べておきたい。「彼は部屋に入ったとたんに用件を切り出した」と「彼は部屋に入るが早いか用件を切り出した」ではどう違うのかという問題である。違いは「たとたんに」は、「部屋に入った」瞬間に「用件を切り出した」という時間性が問題になっているが、「が早いか」のほうは、「他のことをせずに、さっそく」用件を切り出したということを述べるところに重点がある表現なのである。(後件への勢いの強さが感じられる。）前段落末で、「たとたんに」には契機・因果の関係があり、「が早いか」はそのようなことはない、と書いたが、「が早いか」は、このような検討をしてみると、前件と後件に「一連の」動作・変化という関係があるものが多い

と言ってよいのではないかと思う。

## 7. 日本語教育を意識した各形式の記述

上で検討したことを踏まえて、（ただし、語学研究の面では必要とされるが、日本語教育でそれを持ち出すのは煩雑になるような説明を省き）日本語教育で必要とされるような部分を中心に各形式の記述を試みる。

(A)「～と同時に」などと「たとたんに」などの類似点と相違点

・「～と同時に」「～とすぐに」は客観的に同時や直後を表す形式です。

・機能語の「たとたんに」「かと思うと」「やいなや」「～か～ないかのうちに」「が早いか」は、「～と同時に」などと同じく同時や直後を表します。ただし、「早いなあ」という話し手の感想、意外、驚きなどのニュアンスを強く持つ形式である点が「～と同時に」などと違います。

・「～と同時に」も「たとたんに」なども、後件は否定文にならないのが普通です。

・「～と同時に」などは、後件で意志・命令などの、話し手の表出や相手への働きかけを表す言い方をすることはできますが、「たとたんに」などはできないのが普通です。

(B)「たとたんに」「かと思うと」「やいなや」「～か～ないかのうちに」「が早いか」に関する類似点と相違点

・前件をP、後件をQとすると、Pで表される事態と、Qで表される事態との時間的間隔が短いことは共通しています。（上記（A）の同時・直後と同じ。）

・PもQも動作・変化です。Qには話し手の意志的な動作は来ません。（話し手以外の意志的動作は来ます。）

・また、どの形式も「早いなあ」という話し手の感想、意外、驚きなどのニュアンスを強く持つ形式であるという特徴を持ちます。（上記（A）の再確認）

・違うのは以下の点です。（各形式の特徴）

(1)「たとたんに」

・Pをひとつの出来事として捉えています。

・PとQの間が瞬間的であるという時間性を表すことに重点があります。

・PがQのきっかけであるとか、原因であるというような関係が成り立っていることが多いです。

(2)「かと思うと」

・二つのタイプがあります。

・一つは、時間的な関係を表すものです。時間的な意味ということでは「たとたんに」に似ていると考えられていますが、それと違うところは、PとQを単なる事実と捉えるのではなく、自分が認識した内容と捉えているところです。Pには外側から観察したような内容が来るので、話し手の意志的な動作を表す内容は来ません。（Qに話し手の意志的な動作を表す内容が

来ないのは、上にまとめてあるとおりです。）

・もう一つは、時間的な関係のほか、対比も表している用法です。

・この用法の場合、P、Q が状態ということもあります。時間的な関係を表す「すぐ」や「もう」などが文中に表されることも多いようです。

(3)「やいなや」

・書きことば的な表現です。その特徴を生かして、大げさな言い方や強調するようなときに使います。「やいなや」を使った文がおかしな文だと感じるときには、文体的な面でぴったりした使い方ではないことも多いようです。

・語の構成から考えると、「～か～ないかのうちに」に近い意味であってもおかしくないのですが、（元々そういう使い方だったかもしれませんが）今では、前件の動作・変化の直後に後件が起こることを表す表現です。

(4)「～か～ないかのうちに」

・P の動作が起こる（終了する）かどうかはっきりしないくらいの段階で早くも次の動作・変化が起こったという表現です。

・P の述語によって、P のどの段階の意味であるかが違います。「（言い訳を）聞く」のような場合は、実際に少し聞いた直後に、という意味でしょうし、「解決する」のような場合は、もう少しで解決したと言える段階（まだ完全に解決していない段階）を指します。後者の場合、ここで取りあげた他の形式にはない意味であると言えます。

(5)「が早いか」

・一連の動作・変化を表す表現です。他の形式と違うのは、表現の重点が「P と Q が連続して起こり、その間に他のことが起きていない」というところにある点です。

・典型的な文は、意図的な動作が連続するような文です。P と Q の主体が同じであっても異なっていてもいいのですが、同じことが多いようです。（同じであるほうがより典型的です。）

・P には事柄、Q には意図的な動作が来て、それが連続していることを表す文もあります。そのときには、Q の主体が、P の事柄と時間的隔たりがないようにしているというニュアンスがあります。

・書きことば的な表現です。大げさな言い方や強調するようなとき（動作主体の勢い、例えば、そうしようとねらっていて、機会を捉えて飛びついたようすなどを強調するとき）に使うという感じがします。

## 8.　最後に

日本語教育の参考書を検討し、考察を加え、まとめの代わりに試論という形で大雑把な記述を行ってみた。各形式の全体を見渡して書こうとしたため、分量が多くなった。ゆえに例文を入れる余裕がなく、「7.」の記述だけ見ればわかるという形にできなかったのは残念である。（概略をつかむにはいいかもしれないが、細かい内容に関しては、前の部分を見ていただきたい。）

取りあげた参考書類は、従来からたいへんお世話になっているものばかりである。これらの参考書が出されたことにより、どれほど多くの人の利益になったかわからない。ただ、日本語学の授業で自分が機能語について講義したり、演習で意味や機能について報告してもらったりするようなことをやっていると、各参考書類で書いてあることがそれぞれ違ったり、類義語間相互の関連や相違について、明らかではない部分が多くあることに気付かされ、それについて新たに考え直して見なければならないことがしばしばある。今回は、そのような検討をもとに、このような例文を挙げているのであればこのような記述がなされるべきではないかということを述べようとした。ただ、やはりやっているうちに、教育的な面だけでなく、語学的な面の検討も多くなり、当初の計画よりそちらへ紙面を割くこととなった。

日本語学・日本語教育いずれの分野においても、本稿を今後の機能語諸形式についての検討に役立てていただければ幸いである。

（注 1）他に、益岡隆志・田窪行則（1992）には「バスを降りたとたん、土砂降りの雨が降ってきた。」という例が挙がっている。(p.189 の例 11)

（注 2）「雨が降ってきた」自体は前件とは関連がないが、「雨が降ってきた」＝「雨に降られた」と見なせば、「家を出た」から「雨に降られた」という関係であると考えることもできる。そのような意味を読み込むか否かで、非文かどうかの判定が揺れるという可能性はあるだろう。論者の間で意見が分かれるということの背景には、事態をどのように見なしているかの問題が存在している可能性がある。

（注 3）馬場（1997）は、「か」の有無による違いについて考察している。

（注 4）森田・松木（1989）では、すでに同時性を表すもの（p.82）と対比を表すもの（p.128）に分けている。

（注 5）この仮説は構成的なものである。例えば辞書の記述においても、①歴史的記述、②分布的記述、③構成的記述がありうる。①はその語の変遷を調べ、それに沿って記述する方法である。②は歴史的にどうだったかではなく、現代語でその語がどのような分布をしているかを調べ、それに沿って記述する方法である。③はこのような位置づけにしておけば、その語の性格がはっきりするという立場から、積極的に位置づけをして記述する方法である。

（注 6）松木（1997）は、本動詞「思う」から、複合辞＝機能語としての「と思うと」への意味拡張・形式化について論じたものだが、その中で複合辞「と思うと」を、「客観的描写、自然ななりゆき」→「意外性、驚きの強調」→「対照的関係」の方向で意味の拡張が進んでいるとしている。馬場（1997）では、「かと思うと」等の表現は同時性ではなく継起を表すのが本質的とし、条件→継起→（継起のうち同時性を表すもの）→対比、と連続するとしている。これに対して少し述べておくと、元々「と」や「ば」に、「頭が西を向けば、尾は東を向く。」とか「権兵衛が種をまくと、烏がほじくる。」のような対比的であると感じられる用法があるのに、どうして、条件と対比をわざわざ同時性を介してつなげなくてはなら

ないのかという疑問がある。またこの論文では本来時間を表す「と同時に」が対比の用法も持つと述べ、同時性と対比のつながりを確保し、「かと思うと」等の継起性と対比のつながりも同様のことが言えるとしているが、予め同時性が内包されている「と同時に」とそうではない「と思うと」を同列に扱って良いかという問題がある。また、継起か対比かは結局、前件事態と後件事態の関係によって決まるとしている。しかし、それならば、元々「と」や「ば」に、継起的側面、対比的側面があって、どんな内容を繋ぐかによって、どちらの意味であるかが決まる（どちらの意味も感じることもある）ということに過ぎないということになってしまうのではないだろうか。（これは穏当な意見である。ただし、そう考えると上記の条件→継起→同時→対比の意味がなくなってしまう。）

（注 7）これは、現代人が「as soon as」の訳語として「やいなや」に最初に出会うのからではないかという見通しを持っているのだが、確たる証拠はない。どなたかに実証していただけるとうれしいのだが。現代人のことはともかく、「やいなや」が「as soon as」の訳語として定着した経緯を跡づけるとか、あるいはもっと範囲を広げて時間を表す表現の翻訳語に何を使っているのかを調査するとか、場合によっては蘭語などの文献にさかのぼって、時間表現の翻訳語の体系を描いてみるとか、知りたいことは多いのだが、これらを自分でやるつもりはないので、どなたかがやるのを待ちたいと思う。なお、『文辞』の「たとたんに」の項の解説には、話し手の意志的な動作を表すときには、「とすぐに／やいなや」が用いられるとあるが、「やいなや」が「とすぐに」と同様であるとは思えない。基本的には、話し手の意志的な動作を表さない形式なのではないかと思う。ただし、上記のように「as soon as」の訳語という感覚の影響で、「とすぐに」と同様の使い方に寛容になってきているということはありうる。

（注 8）「彼が入ってくると同時に彼女は出て行った。」は良いが、「彼が入ってくると同時に彼女は出て行かない。」はおかしい。これは、時を置かず続く動作を表すという意味的制約から否定が言えないのである。（だから、そういう意味ではないとき、例えば「彼が入ってくると同時に彼女は出て行ったのではない。」ならば言える。）そしてそれは、「と同時に」にも、機能語の諸形式にも共通する性質である。したがって、否定が不可ということと、機能語諸形式の後件制約である命令・意志などが不可ということとは、レベルが違う話ということになる。ここでの記述は教育向けということでしかたがない面があるが、語学的には区別をしなくてはならないだろう。

**参考文献**

グループ・ジャマシイ編（1998）『教師と学習者のための　日本語文型辞典』（くろしお出版）　（なお、本文では『文辞』と略記している。）

白川博之監修（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（スリーエーネットワーク）（本文では『ハンド』と略記している。）

友松悦子・宮本淳・和栗雅子（1996）『どんな時どう使う　日本語表現文型 500』（アルク）（なお、

本文では『500』と略記している。）

馬場俊臣（1997）「条件表現形式による継起・対比・反期待用法―『(か）と思うと、思ったら、思えば』について―」（『北海道教育大学紀要　第1部A　人文科学編』47 - 2）

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改訂版―』（くろしお出版）

松木正恵（1997）「『と思うと』の連続性」（『早稲田大学教育学部　学術研究　国語・国文編』45）

森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型』